

第5章 後論

1 西遠江における陶硯の様相と地方官衙

(1) はじめに

陶硯は古代の文房具であり、文字を書く際には欠かせない道具の一つである。また、文字の使用が限定向か時代には、一部の人たちだけが保有していた道具であるため、使用されていた場所が限定される遺物でもある。そのため、古代においては、律令制の開始による文書行政の導入と関連して、陶硯が出土する遺跡は、当時の行政機関である国府や郡家などの官衙遺跡と考えられる。

今回実施した宮竹野際遺跡6次調査では5点の陶硯が出土しており、これまでの調査分と併せて計12点の陶硯が当遺跡では出土している。この数は西遠江では、吉美中村遺跡や井通遺跡に次ぐ数量であり、当該地域での出土数としては突出して多い。さらに、宮竹野際遺跡では「北家」と墨書きされる土器が出土しており、郡家に付属する施設での陶硯の使用実態を知るうえで注目される。そこで本稿では、西遠江における陶硯の様相を各型式の消長や出土遺跡の分布の特徴から検討し、宮竹野際遺跡出土陶硯をその中で位置づける。さらに、宮竹野際遺跡の性格についても地方官衙との関係から考察したいと思う。なお、本稿でいう西遠江とは主に天竜川西岸地域の遠江国の範囲を指すものである。

(2) 西遠江出土陶硯の分類と変遷

まず、西遠江で出土した陶硯を分類し、其伴遺物や他地域での出土状況から各型式の年代を推定し、その消長を検討する。陶硯の分類については多くの先行研究があるが、今回は平城京出土陶硯の分類（奈文研 2006・2007）と横田氏・杉本氏の分類（横田 1983、杉本 1987）を参考とした。そのため、分類について詳述しないが、圈足硯については細分したので、その点については詳述する。

分類 西遠江で出土した陶硯には、円面硯（圈足硯・蹄脚硯・獸脚硯・低脚硯・無脚硯・中空硯）や形象硯（亀形硯・宝珠硯）、高坏形硯、風字硯がある。円面硯の内、圈足硯は脚部の透かしにより細分し、脚部の透かしが細い長方形で、数が多いものを圈足硯a、脚部の透かしが方形や円形、またはそれらを組合せたもので、数が少ないものを圈足硯b、透かしと透かしの間に線刻を施すか、または透かしがなく線刻のみのものを圈足硯cとした。これら圈足硯は分類ごとに形態や大きさも異なり、透かしの形態が器形にも反映されている。

圈足硯a (Fig.73-1~17) 圈足硯aは西遠江で17点出土している。硯面は、平坦で陸部と海部を凸凹により分けるものと分けないもの、陸部と海部を段差により区別するものがある。脚部形態は壺・甕類の口縁部と共通する。その出現時期は、7世紀後半～8世紀前半頃の遺物と共に1・2の時期と考えられる。さらに、9世紀以降の確実な事例はないため、8世紀代で生産・使用が終わる型式と捉えられる。そのことから、宮竹野際遺跡出土の4は、9世紀以降の層位から出土しているが、8世紀代の遺物と想定され、さらに、愛知県黒笹3号窯跡に類例があるため（小幡

2005)、8世紀後半頃の時期と考えられる。

圈足硯 b (Fig.73-18~35) 圈足硯 b は西遠江で 18 点出土している。硯面は、陸部と海部を段差により区別するもので、その境界に凸帯を付すものが多い。脚部形態は脚付き器種の脚部や大型平瓶・鉢などの口縁部と共通するものが多い。出現時期は、他地域の状況から 7世紀と考えられる。西遠江では 7世紀代の資料と共に伴する事例はみられないが、18・22 は形態的特徴から 7世紀代の遺物とみてよいだろう。さらに、この型式は 8世紀後半以降の遺物と共に伴する事例がみられないため、8世紀後半に生産・使用が終わると考えられる。そのため、宮竹野跡遺跡で出土した 35 は 8世紀中頃～後半にかけての層位から出土したことを考慮すると、8世紀中頃の資料と推測される。

圈足硯 c (Fig.74-36~46) 圈足硯 c は西遠江で 11 点出土している。硯面はいずれも陸部と海部を段差により区別するものである。脚部形態は鏡形の口縁部と共通するものが多いが、吉名窯出土の 44 は同窯から出土する壺類の口縁部と同じである。この型式の出現は、36 が 8世紀中頃と考えられる他は 8世紀後半以降の遺物と共に伴する事例が多く、生産地においても 8世紀後半の窯跡から出土しているため、8世紀後半頃と想定される。また、他の圈足硯と異なり 9世紀以降も使用が確認でき、隣国の三河国でも同様の傾向がみられる (小幡 2005)。さらに、生産地の吉名窯や二川窯で確認できることから、10世紀以降も生産している可能性があり、圈足硯 a・b の衰退後も継続して生産・使用されていたことがうかがえる。加えて、この型式は東日本で広く出土しており (田中 2004・2005・2011)、その出現に東国からの影響が少なからず想定される。また、圈足硯 b と形態や大きさが類似し、その衰退と入れ替わる形で出現することから、西遠江では圈足硯 b を祖形とした型式と捉えることも可能である。

蹄脚硯 (Fig.74-47~49) 蹄脚硯は西遠江で 3 点出土している。いずれも、都城で出土する典型的な蹄脚硯ではなく、47・48 は圈足硯 a の脚上部に粘土を貼り付けたものである。その出現時期は、平城宮で硯部と脚部を一体で作る蹄脚硯が 8世紀中頃に出現していることから (奈文研 2006)、8世紀中頃以降と考えられる。

把手付中空硯 (Fig.74-51~55) 把手付中空硯は西遠江で 5 点出土している。この型式は 7世紀代に特徴的にみられるものであるが (杉本 1987、田中 2004)、西遠江では、出土状況から 7世紀末～8世紀初頭頃に使用が開始され、8世紀前半～中頃には使用されなくなると考えられる。

低脚硯・無脚硯・獸脚硯 (Fig.74) 低脚硯 (56・57)・無脚硯 (58・59)・獸脚硯 (60・61) はそれぞれ 2 点ずつ出土している。これらの陶硯は、56 が 7世紀代の可能性がある他は、他地域の状況を参考にすると、8世紀代の陶硯とみられる。

風字硯 (Fig.75-72~85) 風字硯は西遠江で 14 点出土している。出土した多くは硯面を縦に二分する 2面硯であるが、1点だけ硯面を分割しない風字硯 (79) もある。その出現時期は、8世紀末～9世紀初頭の遺物と共に伴する 72 の時期と考えられる。また、10～11世紀の灰釉陶器窯からも出土していることから、比較的長い期間生産され続けていたことがわかる。さらには、山茶碗窯の皿山窯跡群からも出土しているため (菊川市教委 2006)、12世紀に入っても需要があったことがうかがえる。

小結 以上の検討から、西遠江では陶硯の様相が 8世紀初頭と 9世紀初頭に変化することがみ

1 西遠江における陶硯の様相と地方官衙

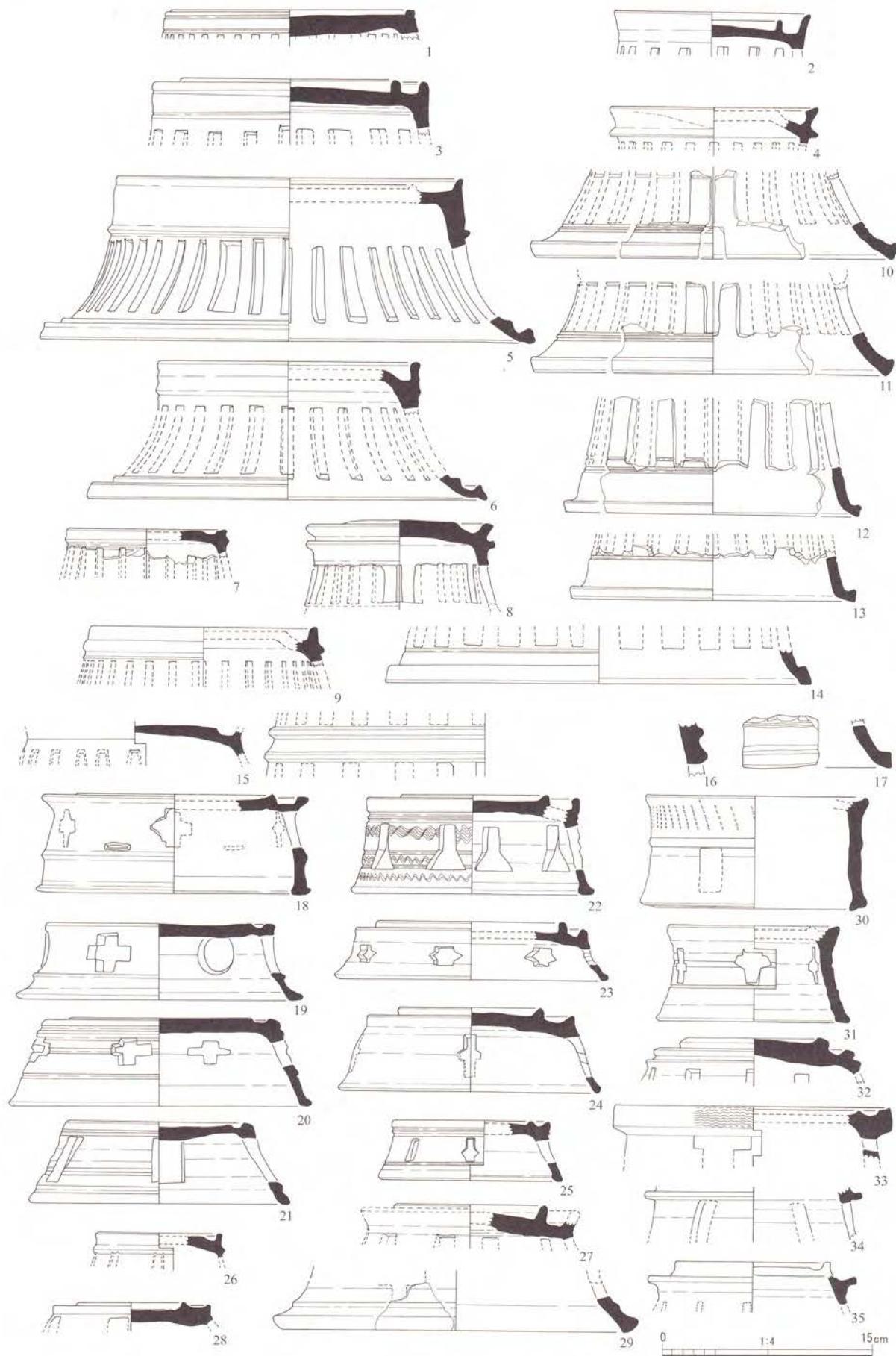
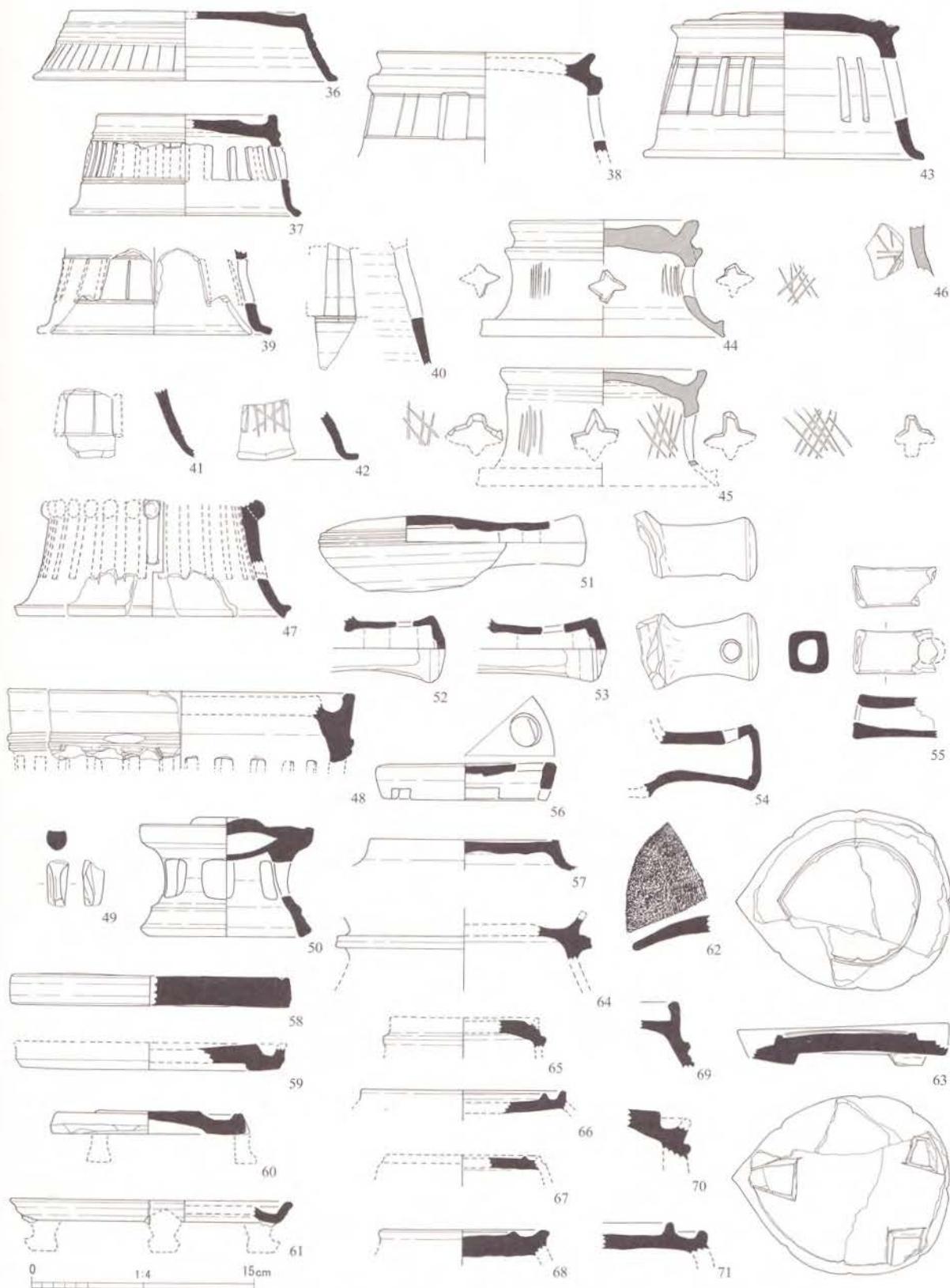


Fig.73 西遠江出土陶硯 (1)



1・2・19～23・28・51～53・56・62・69～71: 吉美中村 3・25・36・67: 城山 4・14・17・35・40・42・48・49・59・64: 宮竹野跡
 5～8・10～13・24・37・39・47・54・61・63・66: 井通 9: 社口 15・26・34・41: 笠井若林 16: 中村 18: 湖西運動公園内
 27: 伊場 29: 梶子 30: 大沢 31: 谷上2地点 32: 一ノ宮事業場 33: 中田北 38: 横枕II 43: 東笠子43地点
 44～46: 吉名1号 50: 殿田4地点 55: 鳥居松 57: 梶子北 58・60: 森西 65: 矢畠 68: 中屋 70: 71

Fig.74 西遠江出土陶硯 (2)

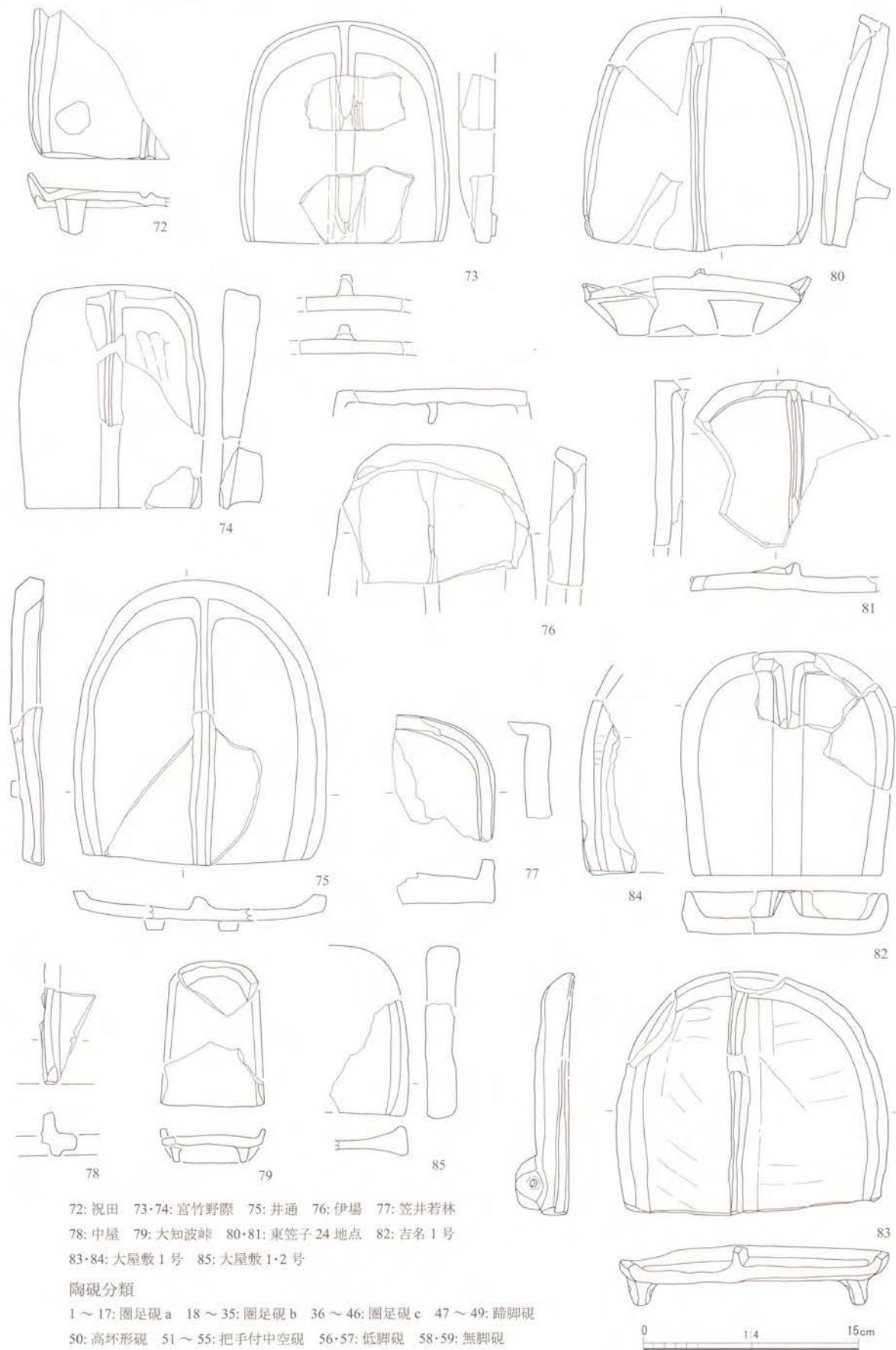


Fig.75 西遠江出土陶硯 (3)

いだせる。8世紀初頭は、大宝令の施行により全国的に郡家が成立する時期であり、官衙の整備に伴い西遠江では陶硯が普及したと想定され、それにより陶硯の様相も一変するとみられる。また、9世紀初頭は平安京に遷都して間もない時期であり、それに伴う生産体制変化の影響が陶硯にも及んだ可能性が考えられる。

(3) 西遠江出土陶硯の分布と特徴

続いて、陶硯が出土した遺跡の分布傾向や出土数などから、陶硯出土遺跡の特徴について検討する。なお、律令期にみられる特徴的な遺物の獸脚付壺（Fig.78）についても陶硯の分布と関連させて検討する。獸脚付壺（以下、本稿では獸足とする）は、短頸壺などの底部付近に獸の足を模した脚部を複数付けるもので、多くは3ヵ所に付けられる。ただし、獸の足を模した脚部は陶硯に付けられる場合もあり、本来は両者を区別しなければいけないが、獸脚硯は出土数が少ないため、ここでは区別せずに検討する。

陶硯出土遺跡の分布 西遠江で陶硯が出土した遺跡は27遺跡あり（Fig.76、Tab.4）、およそ80の陶硯が出土している。陶硯出土遺跡は各郡に分布し、一定の範囲内に集中する傾向がみられる。郡内における分布を詳細にみていくと、遺跡が密集する場合と分散する場合の二つの傾向がみられる。このような傾向が現れる背景として、個々の遺跡の多くが郡家に関連する遺跡である点を考慮すると、郡家の施設や出先機関の存在が分布傾向に現れている可能性が考えられる。また、遺跡の分布傾向と陶硯の出土数の関連性については、遺跡が分散する中にある井通遺跡で陶硯の出土数が多いのに対して、遺跡が集中する伊場遺跡群内では陶硯の出土が少ない特徴がある。井通遺跡は出先機関（郡津）、伊場遺跡群は郡家の中枢域であり、西遠江では陶硯が郡家の中心施設よりもその出先



Fig.76 西遠江陶硯出土遺跡分布図

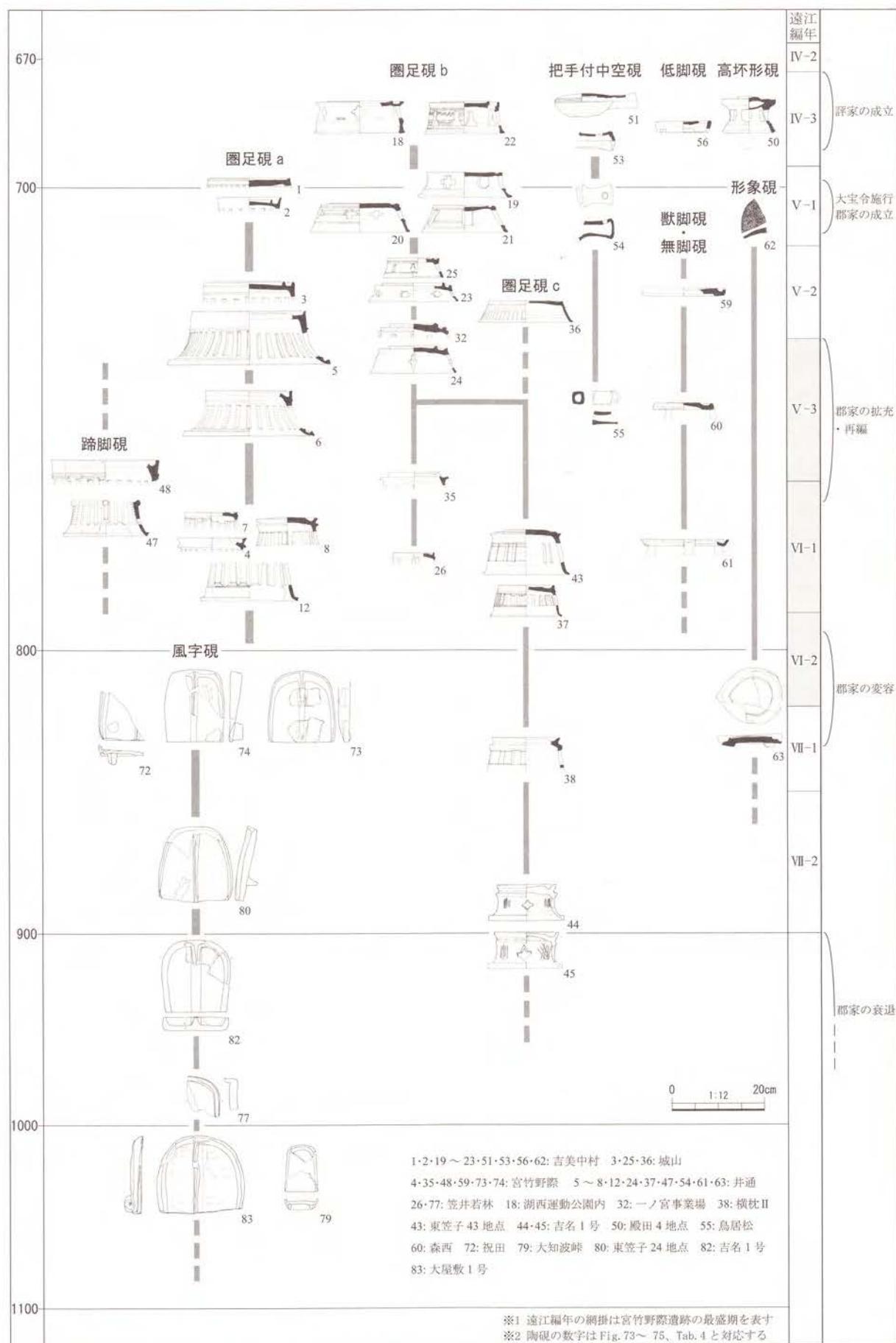


Fig.77 西遠江陶硯変遷図

Tab.4 西遠江陶硯出土遺跡一覧

番号	遺跡名	郡名	遺跡の性格	図版	遺構・層位	種類	分類	転用硯	年代観	獸足	文献
1	大沢	浜	須恵器窯	30	灰原	円	圈足硯 b		IV-1 ~ V-3	1	
2	東笠子 24 地点	浜	須恵器窯	80	灰原	風	2面		VII-2	2	
	東笠子 43 地点	浜	須恵器窯	81	灰原	風	2面		VII-2		
3	一ノ宮事業場	浜	須恵器窯	43	I号窯前庭部	円	圈足硯 c		VI-1	1	3
4	殿田4 地点	浜	須恵器窯	32	流出層	円	圈足硯 b		V-2 ~ 3	3	
5	殿田4 地点	浜	須恵器窯	50	灰原	高			IV-1	3	
6	谷上2 地点	浜	須恵器窯	31	II号灰原	円	圈足硯 b		V-1?	30	
7	横枕 I	浜	不明	図無		円			不明	30	
8	横枕 II	浜	郡家関連か	38		円	圈足硯 c		不明	1	31
						円	圈足硯 b		不明	4	
					1	包含層4 層	円	圈足硯 a	IV-2 ~ V-3		
					2	包含層1 层	円	圈足硯 a	IV-2 ~ V-3		
					19	包含層4 层	円	圈足硯 b	IV-2 ~ V-3		
					20	包含層4 层	円	圈足硯 b	IV-2 ~ V-3		
					22	包含層4 层	円	圈足硯 b	IV-2 ~ V-3		
					28	包含層4 层	円	圈足硯 b	IV-2 ~ V-3		
					51	包含層1 层	円	把手付中空硯	IV-2 ~ V-3		
					52	包含層4 层	円	把手付中空硯	IV-2 ~ V-3		
					53	包含層4 层	円	把手付中空硯	IV-2 ~ V-3		
					56	包含層4 层	円	低脚硯	IV-2 ~ V-3		
					62	包含層3 层	形	亀形硯	IV-2 ~ V-3		
					69	包含層3 层	円		IV-2 ~ V-3		
					70	包含層2 层	円		IV-2 ~ V-3		
					71	包含層4 层	円		IV-2 ~ V-3		
					21		円	圈足硯 b	不明		30
					23		円	圈足硯 b			
10	大知波峰	浜	寺院	79	下段池跡	風	1面	0	百代寺	6	
11	祝田	引	集落	72	SD40	風	2面	1	VI-1 ~ 2	7	
12	矢畑	引	郡家関連か	65	包含層	円		2		8	
					6	SX10	円	圈足硯 a	0	V-3	1
					66	包含層	円				9
					5	大溝中層 II 区	円	圈足硯 a	V-2 ~ 3		
					10	大溝中層 II 区	円	圈足硯 a	V-2 ~ 3		
					24	大溝中層 II 区	円	圈足硯 b	V-2 ~ 3		
					37	大溝中層 III 区	円	圈足硯 c	VI-1 ~ 2		
					8	大溝中層 IV 区	円	圈足硯 a	VI-1		
					12	大溝中層 IV 区	円	圈足硯 a	VI-1		
					13	大溝 IV 区	円	圈足硯 a	VI-1		
					7	SD3004 上層	円	圈足硯 a	VI-1		
					61	SD3004 下層	円	獸脚硯	VI-1		
					54	SD3010	円	把手付中空硯	V-1		
					47	SP3007	円	蹄脚硯	V ~ VI		
					63	SK2015	形	宝珠硯	VI-2 ~ VII-1		
					11	包含層	円	圈足硯 a			
					39	包含層	円	圈足硯 c			
					75	包含層	風	2面	VII以降		
14	伊場	敷	郡家関連	76	大溝 IV 層	風	2面	141	VII以降	1	11
				27	大溝 V 層	円	圈足硯 b	(4)	V		
15	城山	伊場遺跡群	郡家関連	3	整地剝南縁 IV 層	円	圈足硯 a	15	V-2 ~ 3	1	12
				36	整地剝南縁 IV 層	円	圈足硯 c		V-2 ~ 3		
				25	包含層	円	圈足硯 b	1	V ~ VI		13
				67	包含層	円			V ~ VI		
16	梶子北	郡家関連	57	旧河道 IV 層	円	低脚硯	2	V以降	2	14	
17	梶子	郡家関連	29	砂丘包含層	円	圈足硯 b	2(1)		2	15	
18	中村	郡家関連	16	包含層	円	圈足硯 a?	4		2	16	
19	鳥居松	郡家関連	55	大溝 V 層	円	把手付中空硯	9(1)	V		17	
20	大屋敷1 号	龜	灰軸陶器窯	83	灰原	風	2面		百代寺	18	
	大屋敷 1・2 号	龜	灰軸陶器窯	84	灰原	風			百代寺		
				85	表採	風			18・19		
21	吉名1 号	龜	灰軸陶器窯	44	灰原	円	圈足硯 c		K90 ~ 053		19・20
	吉名6 号	龜	灰軸陶器窯	45	灰原	円	圈足硯 c		K90 ~ 053		
			46	灰原	円	圈足硯 c		K90 ~ 053			
			82	灰原	風	2面		K90 ~ 053			
			68	SD1001 上層	円			K14 ~ 053		19・21	
			78	搅乱	風	2面					
			26	SB243	円	圈足硯 b		VI			
			41	SB206	円	圈足硯 c		VI-2			
			34	遺構外	円	圈足硯 b	0		1	23	
			15	遺構外	円	圈足硯 a					
			77	SD296	風		0	H72		24	
24	社口	笠井遺跡群	長?	郡家関連か	9	包含層	円	圈足硯 a	0	V ~ VI	25
			40	SP15	円	圈足硯 c	1(1)			26	
			74	SR01	風	2面		VI-2 ~ VII-1			
			14	古代水田	円	圈足硯 a		V-1 ~ VI-1			
			17	古代水田	円	圈足硯 a?		V-1 ~ VI-1			
			49	古代水田	円	蹄脚硯?		V-1 ~ VI-1			
			42	古代水田	円	圈足硯 c		VII以降			
			64	古代水田	円			V-1 ~ VI-1			
			35	SD06 中層	円	圈足硯 b?		V-3 ~ VI-1			
			4	SR01 I 層	円	圈足硯 a		VI以降			
			48	SR01 I 層	円	蹄脚硯		VI以降			
			59	SR01 I 層	円	無脚硯		VI以降			
			73	SR01 I 層	風	2面		VI以降			
26	森西	長	郡家関連か	58	試掘	円	無脚硯	2	V ~ VII	28	
			60	包含層	円	獸脚硯					
27	中田北	長	集落	33	包含層IVa 層	円	圈足硯 b	0		1	29

*1番号の数字は、Fig. 76 に対応する
 *2 郡名 浜: 浜名、引: 引佐、敷: 敷智
 龜: 龜玉、長: 長上
 *3 図版の数字は、Fig. 73 ~ 75・77 に対応する

*4 種類 円: 円面硯、風: 風字硯、形: 形象硯、高: 高杯形硯
 *5 転用硯の()内は、朱が付着するものの数である

*6 獣足は、獸足の数である

Tab.5 西遠江獸足出土遺跡一覧

番号	遺跡名	郡名	遺跡の性格	獸足	文献
①	古見 16 地点	浜	須恵器窯	3	32
②	梶ヶ谷IV	浜	集落	1	33
③	川久保船渡	引	集落	2	34
④	岡の平	引	集落	1	35
⑤	村西	敷	集落	1	36
⑥	東若林	敷	集落	1	37
⑦	村前山東	敷	集落	1	38
⑧	角江	敷	集落	1	39
⑨	清水	龜	郡家関連か	1	19
⑩	大屋敷5 号	龜	灰軸陶器窯	1	19
⑪	恒武東覚	長?	郡家関連か	2	40
⑫	山の花	長?	郡家関連か	1	41
⑬	山の神	長	郡家関連か	2	42

*1 陶硯出土遺跡は除く

*2 郡名 浜: 浜名、引: 引佐、敷: 敷智
 龜: 龜玉、長: 長上

*3 獣足は、獸足の数である

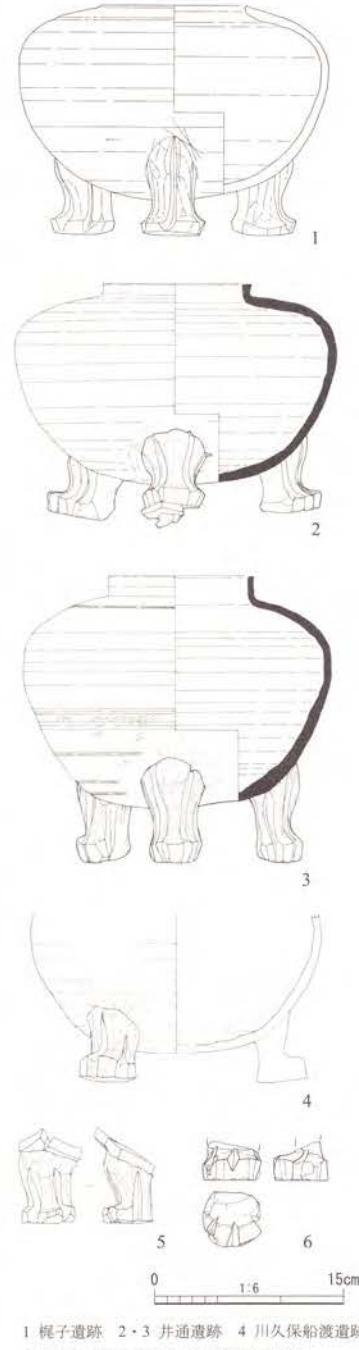


Fig.78 西遠江出土獸脚付壺

機関で多く用いられた可能性が考えられる。加えて、生産地を除く陶硯出土遺跡では転用硯も出土する例が多く、多数の人間が文書行政のため文字を書いていた状況がうかがえる。しかし、すべての遺跡で転用硯が出土するわけではないため、その場合には象徴としての側面も考慮すべきかもしれない（田中 2004）。ただし、西遠江では大きさや希少性などの観点からは象徴的側面はみられず、むしろ遺跡の性格と保有状況をみていくと、文字の使用と無縁ではないことがうかがい知れる。

大知波峠廃寺と中屋遺跡は古代後半～中世の寺院、祝田遺跡は荘園（祝田御厨）に関わる集落であり、識字層の存在が想定される。出土した陶硯はいずれも風字硯であるため、陶硯の年代と識字層の存在が想定される年代とは矛盾せず、陶硯の出土を文字の使用と関係づけて考えても差支えないだろう。また、中屋遺跡は中田北遺跡と同様に7～8世紀に盛行する集落でもあり、ともに円面硯が出土している。両遺跡とも郡家に関連する遺跡とは考えにくいが、遺構や遺物からは一般集落と一線を画していることがうかがえる。そのため、律令制社会で文字を使用する状況を考慮すると、貢納に関わる文書や荷札の作成が郷（里）段階で行われていた可能性を示唆する事例と評価できるのではないだろうか。この点については、荷札木簡の分析から郷における荷札木簡の作成に批判的な見解がだされている（樋口 2003）。そのため、現時点では判断しかねるが、上記のような事例に注目することで、考古学的側面から地方の末端行政の実態について明らかにする手掛かりになると考えられる。

獣足出土遺跡の分布 ここまで陶硯の出土傾向について検討してきたが、続いては獣足の分布と陶硯の関係について検討する。

西遠江では24遺跡で獣足が出土し（Fig.76、Tab.4・5）、その内の11遺跡では陶硯も出土している。獣足出土遺跡の分布は陶硯出土遺跡やその周辺に多く、それらの遺跡から遠く離れて出土することが少ないため、分布傾向は陶硯と類似する（大野 2006）。また、獣足のみが出土する遺跡についてみていくと、集落遺跡で出土する割合も高く、郡家での使用に限定されないことも指摘できる。そのため、分布傾向と併せて考えると郡家に勤務する階層に保有されていたことが推測される。そして、獣脚付壺は、形態的特徴が火舎などの金属製品と類似するため、金属器の代わりとして使用された可能性も考慮される。しかし、遠江の古代寺院において、これまでの調査では、獣足の出土が皆無である点を考慮すると（静岡県教委 2003）、仏教関連遺物とするよりは官衙関連遺物と捉えるほうが現状では妥当と考える。

（4）宮竹野際遺跡の陶硯と地方官衙

ここでは、宮竹野際遺跡出土の陶硯について郡家との関連から検討し、地方官衙における陶硯の実態について触れる。

宮竹野際遺跡の概要 ここまで検討を基に宮竹野際遺跡の陶硯についてまとめると、出土した陶硯は共伴する遺物から8世紀以降のものであり、7世紀に遡る陶硯は出土していない。また、確実な圈足硯bや把手付中空硯を含まず、圈足硯a・cや蹄脚硯、風字硯で構成されていることから、8世紀中頃以降の様相と判断できる。加えて、専用硯と転用硯の比率が拮抗する点も特徴であり、専用硯の10倍以上の転用硯が出土した伊場遺跡群と対照的である（鈴木一 2012）。さらに、陶硯を

多数保有する状況は、類例が乏しいものの、郡家の中枢域というよりは出先機関のような性格を持つと考えられる。この点に関しては、宮竹野際遺跡出土の「北家」墨書き器からも指摘できる。史料上で郡の施設を「郡家」と記す場合があることから、「北家」の意味を郡家の北の施設と捉えることも可能であり、郡家に関する記述の可能性は高いと言える。さらに、宮竹野際遺跡は、長上郡家中枢と想定される大蒲町村東遺跡近辺からおよそ1km北側に位置し、立地状況から「北家」と呼ばれたと推測される。また、「北家」と呼称され始めた時期は墨書き器から8世紀中頃（遠江編年V-3期）と考えられ、この時期に出先機関として本格的に整備された郡家機能の一部を担うようになったため、多くの陶器が消費されたとみられる。

宮竹野際遺跡の性格 宮竹野際遺跡と同様に、西遠江で多数の陶器を出土した遺跡には、井通遺跡や伊場遺跡群、笠井遺跡群（笠井若林遺跡、社口遺跡）、吉美中村遺跡がある。これらの遺跡で出土した陶器や転用器の様相から、宮竹野際遺跡の性格についてみていく。

井通遺跡は、多種の陶器を持つがその中でも圈足器aの数が多いのが特徴である。また、圈足器bや把手付中空器を少量含み、7～8世紀初頭に陶器が使用され始めたことがうかがえる。宮竹野際遺跡とは圈足器aの割合が高い点で同じ傾向を示しており、これは両遺跡とも官衙的機能を8世紀中頃に備えたためと考えられる。西遠江では、圈足器aは7世紀末～8世紀初頭頃に出現することから、郡家の成立に伴って導入される陶器であり、律令的様相を持つ陶器と言える。

伊場遺跡群は、各種の陶器がみられるが出土傾向に偏りはみられず、さらに調査面積に比べて陶器の出土量が相対的に少ない特徴がある。この現象は、伊場遺跡群が敷智郡家の中枢域であることに起因するとみられ、出先機関と想定される井通遺跡とは対照的である。また、笠井遺跡群では、各種の陶器が出土するが、転用器を1点も出土しない特徴がある。転用器が出土した器の大半を占める伊場遺跡群とは対照的な様相がみられる。これは宮竹野際遺跡や井通遺跡でも同じである。転用器の割合が高い伊場遺跡群（郡家の中心施設）と転用器の割合が低い宮竹野際遺跡や井通遺跡、笠井遺跡群（郡家の出先機関または関連施設）とで対比することができ、転用器の比率からも遺跡の性格を判断する基準になり得る可能性は高い（鈴木2012）。このような転用器の比率と遺跡や出土地区ごとの性格については、器の研究で触れられることは少ないが、陸奥国府である多賀城では、

政庁地区の転用器の割合が最も高いことが指摘されている（生田2003）。これは官衙の中心施設で転用器の割合が高い西遠江の状況と同様であり、全国的に官衙の中枢では転用器の割合が高い可能性があることを示唆する事例である。

陶器の東国的様相 これまででは消費地での状況について分析してきたが、生産地における陶器の様相と特徴について検討する。吉美中村遺跡を含む湖西窯跡群では、7世紀に特徴的な圈足器bを多く生

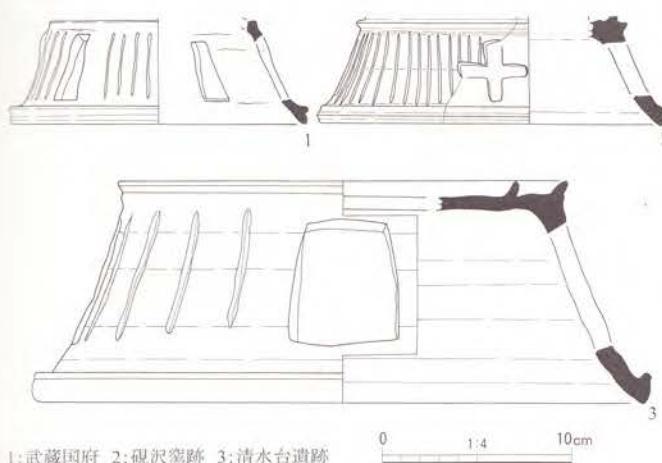


Fig.79 東国出土圈足器cの類例

産している一方で、事例は少ないが、8世紀以降には圈足硯aではなく圈足硯cを生産していることがうかがえる。しかしながら消費地では圈足硯cの割合はそれほど高くなく、生産地と様相を異にしている。では、この圈足硯cについてどのような位置づけが可能であるか検討しておこう。

圈足硯cは東国で多く出土する状況から(Fig.79)、東国的様相を持つ陶硯と考えられる。西遠江における圈足硯cの成立は、出土状況から8世紀中頃と考えられ、宮竹野際遺跡や井通遺跡が官衙的性格を帯びる時期と重なる。圈足硯cは西遠江で出土量は少なく、その出現には東国からの影響が想定され、東国の需要をまかなうために生産された可能性も考慮される。そのため、圈足硯cの多くは東国に供給されたと見られ、西遠江の消費地で出土量が少ないと考えられる。また、隣国の三河国も同様の状況にある(小幡2005)。そのことから、西遠江周辺の生産地が東国の需要にこたえていた状況がうかがえる。これをふまえて、西遠江における陶硯の地域的特徴について最後に触れる。

西遠江における陶硯の様相は、生産地を中心とするが、圈足硯cを含む点で東国的様相を持っている。そして、消費地で希薄な状況からは東国的様相の境界に位置する可能性がある。一方で、消費地では、宮竹野際遺跡や井通遺跡のように、圈足硯aが主体で蹄脚硯も出土する遺跡があることから、都城的様相も持つことが指摘できる。つまりこの地域は、東国的様相と都城的様相が混在する地域であることが最も大きな特徴である。

(5) おわりに

本稿では、西遠江の陶硯について変遷や分布傾向から検討し、それらをふまえ宮竹野際遺跡での陶硯のあり方から、地方官衙における陶硯の実態の一端について明らかにした。特に出先機関での特徴を明らかにすることで、陶硯や転用硯の様相が官衙施設の性格を知る手掛かりを示す可能性があることがわかった。

また、十分な検討を経なければいけないが、西遠江の陶硯は西と東の様相が混在することを指摘できた。それにより、西遠江独自の陶硯の様相が見えてくるだろう。今後は本稿で指摘した東国的様相に注目することで、律令的性格が強い陶硯においても、中央からの一方向的な影響だけではない情報の伝達がみいだせると期待される。

[参考文献]

生田和宏 2003 「城柵官衙遺跡における陶硯の様相—多賀城を中心として—」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所
 大野勝美 2006 「特殊遺物の性格について」『宮竹野際遺跡』静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第165集
 小幡早苗 2005 「三河における古代陶硯の展開」『考古遺物から見た古代三河』第1回三河考古学談話会研究集会
 菊川市教育委員会 2006 『皿山古窯跡群—第7次調査—』菊川市埋蔵文化財報告書 第4集
 郡山市教育委員会 2007 『清水台遺跡—総括報告2006—』
 静岡県教育委員会 2003 『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』静岡県文化財調査報告書 第57集
 杉本宏 1987 「飛鳥時代初期の陶硯—宇治隼上がり瓦窯跡出土陶硯を中心として—」『考古学雑誌』第73巻 第2号
 鈴木一有 2011 「長田郡家と木船廃寺」『木船廃寺跡2次』(財)浜松市文化振興財団
 鈴木一有 2012 「宮竹野際遺跡と長上郡家」『宮竹野際遺跡6次』(財)浜松市文化振興財団
 田中広明 2004 「7世紀の陶硯と東国の地方官衙」『歴史評論』655号
 田中広明 2005 「東国の地方官衙・集落と陶硯」『古代地方官衙周辺における集落の様相』茨城県考古学協会シンポジウム
 田中広明 2011 「坂東と陸奥の陶硯」『東国地域考古学』六一書房

豊橋市教育委員会 2002『二川古窯址群(II)』豊橋市埋蔵文化財調査報告書 第61集

橋崎彰一 1982「日本古代の陶硯一とくに分類について」『考古学論考』小林行雄博士古希記念論文集刊行委員会

奈良文化財研究所 2006『平城京出土陶硯集成 I—平城宮跡—』奈良文化財研究所史料 第77冊

奈良文化財研究所 2007『平城京出土陶硯集成 II—平城京・寺院—』奈良文化財研究所史料 第80冊

西口壽生 2003「畿内における陶硯の出現と普及—飛鳥藤原地域出土資料を中心として—」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所

樋口知志 2003「荷札木簡から見た末端文書行政の実態」『古代の陶硯をめぐる諸問題』奈良文化財研究所

平野吾郎 1992「陶硯」『静岡県史 資料編3 考古三』静岡県

府中市教育委員会・府中市遺跡調査会 2007『武藏国府の調査35』

丸杉俊一郎 2008『地方官衙における徵稅形態の様相』『静岡県考古学研究』No.40

宮城県教育委員会 1987「硯沢・大沢窯跡ほか」宮城県文化財調査報告書第116集

山中敏史 1994『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房

横田賢次郎 1983「福岡県内出土の硯について一分類と編年に関する一試案—」『九州歴史資料館研究論集』9

[図出典]

Fig.73-1 ~ 3・5 ~ 34、Fig.74-36 ~ 43・47・49 ~ 57・61 ~ 71、Fig.75-72・74 ~ 81・83 ~ 85:各遺跡の文献より引用、再トレース

Fig.74-44 ~ 46、Fig.75-82:再整理中の遺物図版より引用 Fig.74-58・60:報告書掲載遺物を再実測し、トレース

Fig.77-1 ~ 6:各遺跡の文献より引用 Fig.78-1 ~ 3:府中市教委ほか2007・宮城県教委1987・郡山市教委2007より引用、再トレース Fig.79:各遺跡の文献より引用、筆者作成

[文献]

- 遠江考古学研究会 1966『大沢・川尻古窯跡調査報告書』
- 湖西市教育委員会 1983『東笠子遺跡群発掘調査概報 昭和57年度』
- 湖西市教育委員会 1992『湖西市一ノ宮工業団地内遺跡発掘調査報告書』
- 鈴木敏則 1983「湖西市運動公園内遺跡群での表採資料」『ホリデー考古』第1号
- 湖西市教育委員会 1990『吉美中村遺跡』
- 湖西市教育委員会 1997『大知波崎廃寺確認調査報告書』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1994『祝田遺跡』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2008『矢畠遺跡』
- 細江町教育委員会 1996『井通遺跡』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2007『井通遺跡』
- 浜松市教育委員会 1994『伊場遺跡遺物編6』
- 可美村教育委員会 1981『城山遺跡調査報告書』
- (財)浜松市文化協会 1993『城山遺跡V』
- (財)浜松市文化協会 1998『梶子北遺跡 遺物編(図版)』
- (財)浜松市文化協会 1998『梶子北遺跡 遺物編(本文)』
- (財)浜松市文化振興財団 2010『梶子遺跡11次』
- (財)浜松市文化振興財団 2012『梶子遺跡13次』
- (財)浜松市文化振興財団 2006『中村遺跡—古墳・奈良時代編—』
- (財)浜松市文化振興財団 2005『中村遺跡(南伊場地区)』
- (財)浜松市文化振興財団 2009『鳥居松遺跡5次』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004『大屋敷C古墳群・大屋敷1号窯』
- 浜北市 2004『浜北市史 資料編 原始・古代・中世』
- 浜北市教育委員会 1989『明神池運動場内遺跡群発掘調査報告書』
- 松井一明・太田好治 2009『吉名窯出土の施文灰釉陶器碗・硯・瓦・相輪』『浜松市博物館報』第21号
- 浜北市教育委員会 1988『浜北市吉名5号・6号古窯跡』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2010『中屋遺跡』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2002『恒武西宮遺跡II・笠井若林遺跡』
- (財)浜松市文化協会 2000『笠井若林遺跡4次』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2005『恒武西宮遺跡III・笠井若林遺跡II』
- (財)浜松市文化協会 1994『社口遺跡』
- (財)浜松市文化協会 1994『宮竹野際遺跡2』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2006『宮竹野際遺跡』
- (財)浜松市文化振興財団 2005『森西遺跡』
- (財)浜松市文化振興財団 2007『中田北遺跡』
- 平野吾郎 1992「陶硯」『静岡県史 資料編3 考古三』
- 静岡県教育委員会 2003『静岡県の古代寺院・官衙遺跡』
- 湖西市教育委員会 1991『加賀山第1~3地点・古見第14~16地点古窯跡発掘調査報告書』
- 新居町教育委員会 1991『三ッ谷土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 細江町教育委員会 1993『川久保船渡遺跡』
- 細江町教育委員会 2005『岡の平遺跡発掘調査報告書』
- (財)浜松市文化協会 1996『若林村西遺跡』
- (財)浜松市文化振興財団 2005『東若林遺跡』
- (財)浜松市文化協会 1992『佐鳴湖西岸遺跡群』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 1996『角江遺跡』
- (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所 2004『恒武東覚遺跡』
- (財)浜松市文化協会 1998『山の花遺跡』
- (財)浜松市文化協会 1986『山の神遺跡発掘調査報告書』
- (財)浜松市文化協会 1989『山の神遺跡』